鉄鋼関連・流通加工

鉄アーティスト 長坂 絵夢さん

木々や枝葉〝モチーフに
作品テーマは「自然循環」

「鉄アーティスト」である長坂絵夢さんは、自らの表現手段に丸棒や薄板あるいは鉄材の加工段階で発生した鉄粉や切り屑などを素材として使用し、これらを「切る」「叩く」「接ぐ」そして「錆びさせる」といった技法でオリジナル作品に仕上げ、これまで数々の機会を通じて世にメッセージを発してきた。

（2面参照）

美大時代に金属専攻

そのルーツをひも解けば、多摩美術大学受験時に「金属専攻」を選択したことに遡る。

多摩美大の工芸学科は「陶」「ガラス」そして「金属」のいずれかを受験の段階で選考する仕組みになっている。「金属」を選んだ理由は「陶やガラスに比べて金属は、それまでの自分にとって身近な物ではなく、扱い方も加工方法も想像つかなかった。それだけに美術・工芸の学問として触れることに強い関心を持った」から。

4年間で鍛金技術の基礎を一通り学び、鉄以外にも銅や真鍮、錫も扱うが「最終的に最も興味深く、肌に合ったのが、私にとっては『鉄』だった」。

学生時代は「加工対象としての鉄が面白い」という感覚で作品をつくっていたが、卒業後、鉄アーティストを志すうえで次第に「何のために…」と自問自答。単なる興味本位を超えた新たなステージの前で表現に行き詰まる。

「ユーザーが存在しない状態のなかで『カタチ』をつくることの難しさ」の壁にぶつかり、その打開に試行錯誤する過程で「鉄と人」をモチーフに平面作品の製作を手掛ける。

以前から「鉄」と「人」との関係性に「漠然と興味があった」という。鉄鋼製品（鋼材）を造るのは人という何気ない思いからだが、錆についても「人の汗や手の脂で触れた形跡で腐食することが、どこか「人間の残像や記憶」と重なり、そこにストーリーを構成した。

その手法は、キャンバスに絵の具で描くのと同様に、鉄板をキャンバスに見立てて、表面を磨いてから腐食液（速錆剤）でデッサンしたあと削ったり叩いたりして表情をつける。

「木の枝」は丸棒、奥の「腐葉土」はスラグや鉄粉

鉄板に筆書きした平面作品も多数紹介

鉄と自然の関係学ぶ

初期にはこの手の作風が多いが「鉄に人を描く」ことへの限界を感じ、イメージと領域を広げるためにも「鉄そのもの」に食い込もうと「鉄の知識をもっと深める」ことを進める。そこで「自然との関わり」を知る。

地球に生命の誕生を促し、生物の生存を支える「鉄（鉄分）」は、自然の中に存在する。

森林では、落ち葉が腐葉土になると腐植酸が生成され、地中の二価鉄イオン（鉄分）と結びついて「腐植酸鉄」となり、川をつたって海へと流れ込む。

それが微生物や海藻類の生育に必要な栄養分となり、それを魚介類が餌とし、回りまわって人間や動物の生命活動に不可欠なミネラルになっていく。

工業的に生産された鉄（鋼材）が、産業界における重要なリサイクル資源であることも広く知られている。

鉄で「自然物」をリアルに創造

目に見える形はもとより見えない状態でも「鉄」が地球上の自然界で重要な機能を果たしそれが壮大かつ身近であることを理解した長坂さん。作品メッセージの幅を広げるとともに、その対象が「人」から「自然物と鉄」との融合へと変化する。

とはいえ具体的に何をどうすればいいのかモヤモヤしているとき「渓流という自然にちなんだ鉄の作品をつくってほしい」との注文が入った。

はじめは平面作品を練っていたが、試行錯誤するうちに「鉄そのもので植物をつくる」に発想を転換。そこでの不安や紆余曲折、時間のかかる調査など苦労も伴ったが「木々の枝と葉そして土壌」を鉄で立体的にリアルに製作する最新のシリーズに辿り着いた。

テーマは「循環」であり「自然や動植物、そして私たち人間の営みに切っても切り離せない存在である『鉄』を使って自然を代表する植物をそっくりにつくる」ことの意義を見出したわけだ。

製作工程は、綿密なリサーチにはじまり、本物を傍らに鋼材を切り、叩き、成形し、溶接し腐植させて完成させる。実に時間のかかる地道な作業だ。

……

講演の最後に「芸術家として大成し、成功するのは実に難しいことだと感じている」としつつも「居ないといけない存在」だと主張する長坂さん。

商品とか言葉で提示しづらいテーマやメッセージを、作家や芸術家が根底に持つ考えに基づきそれぞれの感性で伝え、アピールすることで〝みえづらい部分を共感・共有する〟ことも世の中に必要だと考えるからだ。

時に「現代社会の問題点を訴え、作品を通してその答えを導くのに近づけたり、そんな大袈裟じゃなくても何か物事を考える際の入口になれたりする役割をアーティストは担っている」と自覚する。

今回の講演会は「鉄」を共通アイテムとし、素材としては芸術家も加工業者も取扱品が同じながら、その扱い方が異なる立場同士が今後コラボレーションすると「何か」が誕生・創造できるのではとの可能性を誰もが期待したし、作家と作品に対する出席者の関心度合いをみる限り、少なくとも「鉄の魅力」を再発見・再確認したことは間違いない。

シャ工組 ZSK東京支部青年会

「鉄のオブジェ作家」の長坂さん招き講演会

全国厚板シャリング工業組合・東京支部の若手下部組織であるZSK東京支部青年会（会長・松本延寿松本鋼業社長）はこのほど、今年度の第2回定例会を開催。今回は「鉄のオブジェ作家」の長坂絵夢さんを講師に招き「創造力あふれる鉄鋼製品について」を演題とする講演会を行い、会員多数が参集した。

長坂さんは、美大時代に金属工芸を専攻。卒業後も「鉄」を素材として扱い、自然界における「鉄」の持つ本質を探究しながら、生物の営みの背景にある「循環」をテーマに作品を手掛ける若き鉄のアーティストだ。

講演する長坂さん㊤と、薄板で製作した本物そっくりの「落ち葉」の紹介など盛りだくさん。作品を展示しただけに関心も高く、実物を見ながらの質疑応答も活発に行われ、予定時間を超過するほど盛況だった。

平面、立体物のどちらも手掛けるが、特に最近の新シリーズ「植物」はリアル（本物）を追求しており、講演会で作品の一部に触れた出席者も一見すると本物と見間違えたほど。

講演では、自らの「鉄」との関わりや「鉄」をモチーフとした芸術作品に対する独自の視点や感性、また作品を通じて呼び掛けたい普段とは違う鉄の魅力に触れる機会にしよう」と挨拶した。

松本会長は「同じ鉄を扱う同士だが、鉄を芸術の域に高めたアーティスト作品を通じてアーティストとしてのメッセージや日ごろの製作現場

▼6面「鉄鋼関連・流通加工」版に講演内容詳細